

頻度副詞に関する一考察

—程度副詞との関係をめぐって—

江雯薰(台湾・淡江大学)

1. はじめに

現代日本語において、事態の捉え方から頻度副詞、程度副詞¹をみると、頻度副詞は事態の外側から事態の実現の仕方を限定するものであるが、程度副詞は事態の内側から事態の実現の仕方を限定するものである。頻度副詞、程度副詞の同じ文における位置をみると、頻度副詞は、(1)のように程度副詞の外側にある場合もあれば、(2)のように程度副詞の内側にある場合もある。

(1) 何かをしていただいた御礼をさしあげるとき、何を差し上げたらいいのかいつも非常に悩みます。(http://q.hatena.ne.jp/1207902649)

(2) 大阪人はおにぎりせんべいを非常によく食べる。

(http://chiebukuro.toremaga.com/dir/detail/q1241098252/web)

それに対して、(3)のように程度副詞が頻度副詞を修飾できない場合もある。

(3) *彼は非常に{たびたび/しばしば}一人で山登りをする。(作例)

(1)～(3)をみると、頻度副詞と程度副詞との修飾関係はどのようなものか、そしてそれぞれにはどのような制限があるのかを考察する必要があると思われる。本発表ではそれについて考察する。

2. 先行研究

頻度副詞と程度副詞との関係について論じた先行研究には、管見の及ぶ限り仁田(2002)がある。

¹仁田(2002)では、頻度副詞については、「いつも」「常に」の類、「しょっちゅう」のように高頻度を表すもの、「たびたび」のように中頻度を表すもの、「まれ」のように低頻度を表すものに分けられている。

また、程度副詞については、「いわゆる程度副詞と、およびそれに隣接する量副詞と呼ばれることのある存在を、副詞的修飾成分という立場から、<程度量の副詞>として関連づけて扱い、それらの似かよいと異なりを捉えながら、その下位的タイプ・文法的特性および共起する述語のタイプ・特徴などを見ていくことにする(P145)」とされている。また、「<程度量の副詞>としてまとめたものを、文法的な働き方や共起する述語のタイプから、<程度の副詞>と<量の副詞>に分け、程度の副詞を<純粹程度の副詞>と<量程度の副詞>に分ける(P162)」とも言われている。

仁田(2002)は「程度の副詞によって修飾を受けうる可能性があるのは、一定期間における事態生起の多寡性や生起間隔の隔たりの長さ・長さを表す、事態生起の間隔の長短に関わる頻度の副詞である。このタイプは、生起の多寡性や隔たりの長さという程度性や度合い性を持つ意味を担っていることによって、程度の副詞の修飾を受けうる(P289)」とし、また「「ヒンパンニ」が高頻度、「マレニ」が低頻度の副詞であった。高頻度も低頻度も、程度の極端なものであった。極端であることにより、程度の副詞によって、その程度性を際立たせることが、自然でありかつ効果を持つことになる。それに対して、「タビタビ」や「時々」「時折」といった中頻度のタイプは、頻度が中程度であることによって、その中という程度性を程度の副詞によって際立たせる必要性や効果が、基本的に生じない(P289)」ということも述べている。

先行研究では、程度副詞と頻度副詞とが共起できる条件が示されているが、互いに共起できる場合には、それぞれにどのような構文的な特徴があるのかはまだ論じられていないと言える。

本発表では頻度副詞と程度副詞が共起できない場合の制約を考察し、そして共起できる場合は、文末における述語の特徴、係り先、実現した事態であるかどうか、といった観点から、頻度副詞と程度副詞との関連性を分析し、頻度副詞の体系を明確にすることを目的とする。

3. 程度副詞が頻度副詞の外側にある場合

程度副詞が頻度副詞の外側にあると、以下の(4)～(7)のように共起できない場合がある。

(4) *彼は非常に{たびたび／しばしば／ときどき}一人で映画を見に行く。(作例)

(5) *彼はごく{たびたび／しばしば／ときどき}一人で映画を見に行く。(作例)

(4)(5)では、「たびたび」「しばしば」「ときどき」は中頻度を表す副詞であるが、「非常に」「ごく」は程度の著しさを表す副詞である。両者は共起すると、非文となる。それは、中頻度であり、極端な度合いを示さない「たびたび」「しばしば」「ときどき」が、程度の著しさを表す「非常に」「ごく」²と釣り合わないからである。このことは仁田(2002)でも述べられている³。また、

(6) *彼はごく{よく／ひんぱんに}一人で映画を見に行く。(作例)

(7) *彼は非常に{まれに／たまに}一人で映画を見に行く。(作例)

²仁田(2002)では、純粹程度の副詞と量程度の副詞との異なりを識別するテストについて、「「オ酒ヲ [X] 飲ンダ」／「[X] 歩イタ」などの「X」の箇所挿入できるか否か、というテストである。挿入可能なタイプが、量程度の副詞であり、挿入すると逸脱性を生じてしまうのが、純粹程度の副詞である(P163)」とされている。

³仁田(2002)では、「高頻度も低頻度も、程度の極端なものであった。極端であることにより、程度の副詞によって、その程度性を際立たせることが、自然でありかつ効果を持つことになる。それに対して、「タビタビ」や「時々」「時折」といった中頻度のタイプは、頻度が中程度であることによって、その中という程度性を程度の副詞によって際立たせる必要性や効果が、基本的に生じない(P289)」と述べられている。

(6)では、「よく」「ひんぱんに」は高頻度を表す副詞であり、「ごく」と共起すると、非文となる。また、(7)の「まれに」「たまに」は低頻度を表す副詞であり、「非常に」と共起すると、非文となる。「よく」「ひんぱんに」「まれに」「たまに」のいずれも極端な度合いを表す頻度副詞である。一方、「ごく」は程度が極限近くにあることを、「非常に」は程度の甚だしさを表す程度副詞である。(6)(7)が非文となることから、「ごく」は高頻度を表す副詞と、「非常に」は低頻度を表す副詞と相容れないと言える。つまり、両極端を表す頻度副詞と共起できるかどうかは「ごく」「非常に」の表す語彙的な意味と関わっている⁴。このことは、次の共起できる場合からも説明できる。

(8) 義理の母が非常に頻繁に肺炎になります。

(http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q1168249561)

(9) 大阪人はおにぎりせんべいを非常によく食べる。

(<http://chiebukuro.toremaga.com/dir/detail/q1241098252/web>)

(10) 私たちは、そこで酒を飲み、女とつき合い、議論をし、時には稼ぎ、ごくまれに勉強をした。(風に)

(11) 青雲堂のおじさん小母さんも、もとより桃子を心から歓迎し、それからごくたまに、桃子はここで下田の婆やに会った。(榆家)

(8)(9)((2)の再掲)のように「非常に」が「頻繁に」「よく」のように高頻度を表す副詞と共起でき、(10)(11)のように「ごく」が「まれに」「たまに」のように低頻度を表す副詞と共起できる。つまり、「非常に」は高頻度を表す副詞と、「ごく」は低頻度を表す副詞と相容れるのである。

以上から、程度の甚だしさを表す程度副詞は中頻度のように程度の度合いが際立たない頻度副詞と共起しないことと、高頻度を表す副詞と低頻度を表す副詞が程度の甚だしさを表す程度副詞と共起できるかどうかは程度副詞の表す語彙的な意味と関わっていることが明確になった。

ところで、程度副詞が頻度副詞と共起できる場合を見ると、「非常によく」「非常に頻繁に」「ごくたまに」「ごくまれに」がある。これらの構文的な特徴を考察すると、以下のことが見られます。

A) 文末における述語の特徴を見ると、「運動性」「限界性」は、「非常に頻繁に」の述語にとっては重要であるが、それに加えて「状態性」も「非常によく」「ごくまれに」「ごくたまに」の述語にとっては重要である。

⁴飛田・浅田(1994)では、「非常に」について、「話者の主観として程度が通常の状態を超えてはなはだしいことを誇張するニュアンスがある。好ましい程度についても好ましくない程度についても用いられる(P443)」と説明されている。また、「ごく」について、「程度が極限に近い範囲にある様子を強調して表すが、程度がはなはだしいこと自体については、特定の感情は暗示されていない。また、極限が考えられるものの程度について用いられ、極限が存在しないものの程度についてはあまり用いられない(P146)」と説明されている。

(12) この中学校では無断欠席をする子が{○非常によく／*非常に頻繁に／○ごくまれに／○ごくたまに}いる。⁵(作例)

(13) この会社では上司からの嫌がらせは{○非常によく／○非常に頻繁に／○ごくまれに／○ごくたまに}ある。(作例)

(12)の「いる」は存在を表し、「状態性」を持つものである。これは工藤(1995)で言えば、いわゆる静態動詞である。一方、「ある」は「状態性」を持つ静態動詞であるが、(13)のように「起こる」と解釈でき、「運動性」⁶をもつ場合もある。「状態性」を持つ述語は「非常によく」「ごくまれに」「ごくたまに」の文末にくることはできるが、「非常に頻繁に」の場合にはできない。また、「運動性」を持つ述語が文末にくる場合をみると、

(14) 彼女は{○非常によく／○非常に頻繁に／○ごくまれに／○ごくたまに}ドラマに出演する。(作例)

(15) 彼女は{○非常によく／○非常に頻繁に／○ごくまれに／○ごくたまに}意見が変わる。(作例)

(14)の「出演する」は動作を、(15)の「変わる」は変化を表し、いずれも「運動性」を持つ動詞である。このような動詞が文末にくることができる、ということから、「運動性」は「非常によく」「非常に頻繁に」「ごくまれに」「ごくたまに」の文末の述語にとっては重要な要素の一つであると言える。ただし、次の(16)～(19)のように「運動性」を持っていても非文になる場合がある。

(16) *彼は{非常によく／非常に頻繁に／ごくまれに／ごくたまに}田舎に住む。(作例)

(17) *彼は{非常によく／非常に頻繁に／ごくまれに／ごくたまに}郵便局に勤める。(作例)

(16)の「住む」は「ある家や場所で長期間生活する」ことを、(17)の「勤める」は「長期間会社などに勤務する」ことを表し、いずれも「運動性」が希薄である⁷。また、その長期間居住している状態や勤務している状態には「限界性」がない。(16)(17)が非文となることから、各副詞を用いる文には「運動性」だけでなく、「限界性」も必要であると言える。このことは、次の(18)(19)も説明できる。

(18) ?彼は{非常によく／非常に頻繁に／ごくまれに／ごくたまに}泳ぐ。(作例)

(19) ?彼は{非常によく／非常に頻繁に／ごくまれに／ごくたまに}走る。(作例)

(18)の「泳ぐ」と(19)の「走る」は「限界性」を持たない動詞である。各副詞と共起すると、許容度が落ちるが、(18)は「川で」、(19)は「公園を」のような補語を入れると、許容度が高くなる。それは、「川で」「公園を」が「泳ぐ」「走る」といった「限界性」を持たない動作に全体量を限定するからである。このことから、「限界性」も必要であると言える。

⁵「この中学校では無断欠席をする子が非常に頻繁にいる。」という文は、「この中学校では無断欠席をするケースが非常に頻繁に起こる」と解釈するなら、非文とならない。

⁶「運動性」とは出来事や事態が動作や変化をしている様子を表すことをいう。

⁷「住む」「勤める」のような動詞は動作動詞に属するが、長期間の状態を表すもので、「走る」「読む」のような実際の動作を表す動作動詞よりも「運動性」が希薄である。

以上から「運動性」「限界性」は「非常に頻繁に」の文末の述語にとっては重要であるが、それに加えて「状態性」を持つ述語も「非常によく」「ごくまれに」「ごくたまに」の文末に来ることができると言える。つまり、「状態性」を持つ述語は「非常に頻繁に」の持っている語彙的な意味と相容れないのである。

B) 係り先から見ると、程度副詞は頻度副詞との間に緊密度が高く、頻度副詞の程度性を修飾する。

係り先からみると、程度副詞は頻度副詞に係り、その緊密度が高い。

(20) このパタンは非常によくある。(作例)

(21) 消費税を引き上げるといった動きが非常に頻繁にされています。

(http://sidlauhizoi.net/bit/no_9)

(22) ごくたまに、なんの脈絡もなく、僕はこのドゥーワップ・グループの名前を思い出す。(ラハイナ)

(23) ごくまれに、隣の祖母が庭の桔梗などを一りん、小さな壺に入れて持って来てくれたりする。(太郎)

(20)～(23)では、「非常に」「ごく」はその直後にくる頻度副詞とは切り離せず、それぞれの程度性を限定する。つまり、程度副詞はその直後にくる頻度副詞との緊密度が高く、その程度性を強調すると言える。

C) 実現した事態であるかどうかといった観点からみると、各副詞を用いる文のいずれも実現した事態を表さなければならない。

(24) * {非常によく / 非常に頻繁に / ごくまれに / ごくたまに} 部屋を掃除しよう。(作例)

(25) * {非常によく / 非常に頻繁に / ごくまれに / ごくたまに} 部屋を掃除してください。(作例)

(26) * {非常によく / 非常に頻繁に / ごくまれに / ごくたまに} 部屋を掃除せよ。(作例)

意志、依頼、命令のいずれも未実現の事態を表す。(24)～(26)が非文となることから、「非常によく」「非常に頻繁に」「ごくまれに」「ごくたまに」を用いる文は実現した事態でなければならないと言える。次の(27)のように未来においても確実に実現する事態なら、「する」形を用いても非文とならない。

(27) 彼女は {○非常によく / ○非常に頻繁に / ○ごくまれに / ○ごくたまに} 部屋を掃除する。(作例)

以上のことから、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合は、実現した事態を表さなければならないと言える。

4. 頻度副詞が程度副詞の外側にある場合

頻度副詞が程度副詞の外側にある場合は、「いつも相当に」「いつも非常に」「いつも極めて」などの使い方がある。以下では「いつも非常に」を中心に考察する。

A) 文末における述語の特徴を見ると、「状態性」「程度性」を持つ形容詞、形容動詞、感情動詞などが文末にくることができる。

(28) そういうことは{いつも} 非常に多いです。(語る)

(29) 家族としては{いつも} 非常に迷惑です。(語る)

(30) この会社の管理はいつも非常に問題がある。(作例)

(31) 私は登校や下校のたびごとに、{いつも} 彼に出会うのを非常に懼れた。(白い人)

(28)の「多い」は「物事がたびたび起こる」ことを、(29)の「迷惑です」は「ある行為がもとで、他の人が不利益を受けたり、不快を感じたりする」ことを表す。また、(30)の「問題がある」は「困った事柄や厄介な事件がある」ことを、(31)の「懼れた」は「危険を感じて不安になる」ことを表す。これらのいずれも「状態性」をもつ例である。このようにみると、「状態性」は「いつも非常に」にとっては重要であると言える。但し、次の(32)の「いる」のような動詞を用いると、非文となる。

(32) *彼はいつも非常に図書館にいる。(作例)

それは、「いる」が均質的な状態を表し、程度性を持たないからである。(32)が非文になるということから、「いる」は程度の甚だしさを表す「非常に」と相容れないと言える。また、

(33) 米内は、{いつも} 山本を非常に信頼していた。(五十六)

(34) …(前略)…、高木惣吉は戦後 {いつも} それを非常に残念がって、著書の中に書いている。(五十六)

動詞が文末にくることができる場合の多くは、(33)の「信頼する」や(34)の「残念がる」のように感情を表す動詞である。それは、人の感情には「程度性」があるからである。

以上から「状態性」や「程度性」は「いつも非常に」を用いる文には重要であると言える。

B) 係り先から見ると、頻度副詞は程度副詞が修飾する事態の頻度性を限定し、程度副詞との間に緊密度が高くない。

(35) {いつも} バスは非常にゆれた。(孤高)

(36) 七月と八月は杉村さんがお芝居に出てらしたから、撮影を休んだんですよ。{いつも} それが非常に心配でね。(阿川1)

(37) 父が死んで以来、信夫は {いつも} 一家三人の心の結びつきを、非常に大事に思って来た。(塩狩峠)

(35)(36)では、「いつも」は、「バスは」「それが」の前と後とのどちらかに置くことができる。(37)では「いつも」は「非常に」の前に置くより、「一家三人の心の結びつきを」の前に置いたほうが自然であると思われる。このようにみると、「いつも」は「非常に」と切り離してもよい、つまり頻度副詞は程度副詞との緊密度が高くないと言える。

C) 実現した事態であるかどうかといった観点からみると、「いつも非常に」を用いる文は実現した事態を表さなければならない。

(38) *彼をいつも非常に信頼しよう。(作例)

(39) *彼をいつも非常に信頼してください。(作例)

(40) *彼をいつも非常に信頼せよ。(作例)

(38)～(40)のように意志、依頼、命令は未実現の事態を表すモダリティ形式である。(38)～(40)が非文であることから、「いつも非常に」を用いる文は実現した事態でなければならないと言える。それは次の(41)も説明できる。

(41) 彼の家に行くと、いつも非常に丁寧にもてなされる。(作例)

(41)の「彼の家に行くと、丁寧にもてなされる」ことは過去の経験から述べる文である。つまり、実現した事態に対して述べる文である。

以上から、「いつも非常に」を用いる文は実現した事態でなければならないと言える。

5. まとめ

以上の考察から、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合は、実現した事態を表わさなければならないという点で、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合と共通している。だが、次のような違いがある。

文末の述語からみると、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合は、「非常に頻繁に」のように文末に「運動性」「限界性」が必要であるものもあれば、「非常によく」「ごくたまに」「ごくまれに」のようにそれに加えて「状態性」もくることができるものもある。それに対して、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合は、「いつも非常に」のように「状態性」「程度性」が必要である。

係り先からみると、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合は、程度副詞がその直後に来る頻度副詞とは切り離せずに係っているのに対して、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合は、頻度副詞を程度副詞と切り離してもよい。このことから、程度副詞と頻度副詞の緊密度を見ると、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合のほうが高いと言える。

このように見ると、程度副詞が頻度副詞の外側にある場合には、頻度副詞は文全体の頻度を示し、程度副詞は頻度副詞を強調するのであるのに対して、頻度副詞が程度副詞の外側にある場合には、程度副詞は直後にくるものの性質などを修飾し、頻度副詞は程度副詞の修飾する事態全体を包み込むのであると言える。

参考文献

- 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」、渡辺実編『副用語の研究』、明治書院。
工藤浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」、森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3 モダリティ』、岩波書店。
陳連浚(2011)「「非常に」についての一考察」、『日本研究』24、日本研究研究会。
西原鈴子(1991)「副詞の意味機能」、『副詞の意味と用法』、国立国語研究所、大蔵省印刷局。
矢澤真人(2000)「副詞的修飾の諸相」、仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人、『日本語の文法1 文の骨格』、岩波書店。
仁田義雄(2002)『副詞的表現の諸相』、くろしお出版。
飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』、東京堂出版。
森田良行(1989)『基礎日本語辞典』、角川書店。

使用テキスト (例文の文末には、実例の場合は出典を記し、作例の場合は「作例」と表記し、インターネットで調べた例の場合はそのホームページアドレスを書く。)

風に＝五木寛之『風に吹かれて』(CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊)新潮社(1995)

語る＝阿川佐和子『男は語る』(文春文庫)文藝春秋(1992)

白い人＝遠藤周作『白い人・黄色い人』(新潮文庫)新潮社(1960)

太郎＝曾野綾子『太郎物語』(CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊)新潮社(1995)

楡家＝北杜夫『楡家の人々』(CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊)新潮社(1995)

日々＝江國香織『こうばしい日々』新潮文庫(1995)

ブン＝井上ひさし『ブンとフン』(CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊)新潮社(1995)

ラハイナ＝片岡義男『ラハイナまで来た理由』同文書院(2000)

<付記> 本発表は 101 年度台湾国家科学委員会研究計画(NSC101-2410-H-032-065)の成果の一部である。